



北方民族博物館だより

No.98



H3.12 彫刻付き棍棒^{こんぼう} ヌートカ 1890年頃
カナダ バンクーバー島 55.5cm

北西海岸インディアンが用いた棍棒には、木製、石製、海獣骨製の3つの素材がみられる。木製の棍棒は、漁においてとどめ用に使われた殺魚棒（魚叩き棒）である。石製と骨製の棍棒は、アザラシ類などの海獣やシカ類などの陸獣狩猟に用いられたほか、戦争でも使用された。

本資料は、クジラ骨製で両刃形の形状をしており、柄の先には鳥の頭の彫刻が施されている。本資料のような棍棒は、バンクーバー島のヌートカに特有のものとされる。戦争用の棍棒として用いられ、戦いを指揮する者の地域を示す機能も持っていた。

目次 Contents

- 1 表紙 彫刻付き棍棒
- 2-3 第30回特別展「森と川の精霊とともに ロシア・アムール地方のアート&クラフト」
／北海道博物館紀行「礼文町郷土資料館」
- 4 調査「能取岬西岸遺跡の発掘調査」／講座「北方の機織り」
- 5 アイヌの人たちの歴史・文化に関する学習授業の実践について／北方民族博物館映像上映会
- 6 INFORMATION



北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

第30回特別展

森と川の精霊とともに ロシア・アムール地方のアート&クラフト

2015.7.18-10.25

アムール川は、ロシアと中国の国境をなし、オホーツク海にそそぐ、長さ約4,400km、流域面積約18,500km²にもなる大河です。本展ではアムール川流域の、ロシア・沿海地方からハバロフスク地方南部をアムール地方とし、開館以来この地方で収集してきた資料を紹介しました。

この地方にはナーナイ、ウデヘ、ウリチ等のツングース系諸民族とニブフが暮らしてきました。使われてきた道具類は、手近な動植物や鉱物を材料にしたもので、機能にそった洗練された形やデザインをもっています。

さらに、森や川には精霊が住むとし、シャマニズムを信奉する心は、木偶やまじない具といった独特な儀礼具をうみだしました。近隣との交流や、中国から日本への交易ルート上にあったことから、文化要素には異文化の影響をみることもできます。

近年では生活の道具というよりも、はじめから芸術作品として作られるものもあります。

白樺樹皮製品

アムール地方で白樺は重要な植物です。特に樹皮が重宝されました。6～7月が樹皮をはぐ好機とされ、各種容器やゆりかご、大きなものでは船までさまざまなものが作られました。白樺樹皮製品にはとがった工具の先で突いたり、黒く染めたりして、文様が施されることもありました。

アムール地方でよくみられる文様の一つは「うずまき」です。うずまき文様は素材を問わず、白樺樹皮製品にも木製品にも布製品にも施されています。このうずまき文様は、アムール地方からサハリン島、北海道でもよくみられますが、うずまきの中に動物の形がはいることがあるのがこの地方の特徴です。



白樺樹皮製品

魚皮

アムール地方の魚を材料にして、ナーナイやウリチがすぐれた魚皮なめしの技術を発揮していることはよく知られています。魚皮は基本的にはたたくことで柔らかくなめされます。

布装飾

アムール地方の女性は刺繍^{ししゅう}やアップリケなどを衣装や靴、手袋や帽子などに施します。色とりどりの布や糸を用い、その技を競い合いました。

ナーナイの花嫁衣装の背中側の腰のあたりに刺繍されているのが「生命の木」とよばれる文様です。ナーナイではこどもの靈魂は鳥の形をしていると考えられていました。つまり生命の木にとまっているのは、これから生まれてくるこどものイメージで、全体で子孫繁栄を祈る文様になっています。生命の木は世界各地でみられる文様で、これも伝播したものとされます。

花嫁衣装の前身頃には中国の影響を受けた龍のうろこ文様がほどこされています。



ステージ展示の様子

森と川の精霊

アムール地方の宗教観には、アニミズム、トーテミズム、シャマニズム、狩猟儀礼、祖先崇拝、靈魂の確信、自然・聖地への信奉があります（ロシア科学アカデミー極東支部歴史・考古・民族学研究所 2003）。

こうした伝統的宗教観は、諸民族の各種儀礼、芸術にも反映されてきました。特にシャマンの道具や木偶に独特なものがあります。

精霊と交信をするシャマンは自分を助けてくれる補助霊をもっています。その補助霊は動物の形をしていることが多く、そうした動物の形がシャマンの衣服や道具に施されることもありました。

木偶は目的に応じてシャマンが作るもので、扱いにも注意が払われました。

アムール地方の芸術家

アムール地方では衣装製作、刺繍、切り絵、かご編み、木彫り、絵画、白樺樹皮容器づくりなどの分野で芸術家として活動をしている人たちもいます。

ナーナイ出身の彫刻家で、特別展の講座講師にお招きしたA.P.ドンカーン氏は彫刻や魚皮による作品を発表しています。シャマンではないドンカーン氏が木偶を彫刻することについてこう述べています。

「ナーナイ文化の根底にはシャマニズムがあります。シャマニズムに関する例えば代表的なセヴェン（木偶）や神事があります。セヴェンを作りたい気持ちが募りましたが、私は彫刻家でシャマンではありませんので、セヴェンを作ることは許されません。そこでナーナイの民族学者に相談したところ、神像として祀ってはいけませんが、美術作品として制作することについては問題がないとの回答を得ました。その後自分なりに考えて作品として作るようになりました。」

伝統的なやりかたを正確に伝承することに努める場合もあれば、個人的な経験や世界観を作品にこめたりするなど、芸術活動の方向は多様です。

7月19日には、国立民族学博物館の佐々木史郎氏による解説会を行い約30名が佐々木氏の解説に熱心にききました。



解説会の様子

本展を開催するにあたり、次の方々から協力を得ました。記して感謝申し上げます。

風間伸次郎氏 佐々木史郎氏 津曲敏郎氏 野口栄一郎氏
青柳文吉氏 小野寺マリレイ氏 A.P.ドンカーン氏
(学芸グループ 笹倉いる美)

(参考文献) 2003 ロシア科学アカデミー極東支部歴史・考古・民族学研究所『ロシア沿海地方の歴史：ロシア沿海地方高校歴史教科書』明石書店：東京

北海道博物館紀行

礼文町郷土資料館

2015. 5. 31

講師 藤澤 隆史氏（礼文町郷土資料館 主任学芸員）

講座「北海道博物館紀行」では、道内の博物館活動について、それぞれの博物館の担当者を講師としてお招きし、お話をいただいています。

今回は、北海道北部の離島、礼文島の礼文町郷土資料館の展示内容と島の歴史と文化について、「最北の離島の歴史と文化」と題し、同資料館の藤澤隆史主任学芸員から解説いただきました。

礼文島は、稚内の西方59kmに位置し、島の周囲はおよそ79kmあります。夏は高山植物の花が美しく咲き、豊富な海産物に恵まれている観光と水産の島です。そして、離島ではごくまれな独自の歴史と文化があります。礼文町郷土資料館は、この歴史と文化について、観覧者に分かりやすく紹介する施設です。

礼文島では現在までに、旧石器時代、縄文時代の先史時代からアイヌ文化期まで、55箇所^{ふなどまり}の遺跡が発見されています。このなかでも、島の北部、船泊遺跡から出土した縄文時代の資料が有名です。遺跡からは、縄文時代後期の骨や貝でできたアクセサリーが大量に出土し、注目されました。さらに本州との交易で入手したと考えられるヒスイ製品も出土しました。これら船泊遺跡出土資料は、その高い学術的価値から国の重要文化財に指定され、資料館に展示されています。

この他にも、オホーツク文化遺跡出土資料や現代にいたるまでの礼文島漁業の発展に関する展示も郷土資料館のなかに設けられています。

講座を通じて、礼文島の独特な歴史と文化を学ぶ上で、礼文町郷土資料館が果たしている重要な役割を知ることができました。

(学芸グループ 種石 悠)



藤澤 隆史氏

調査

能取岬西岸遺跡の発掘調査

2015. 6. 16-6. 22

能取岬西岸遺跡は、景観地として有名な網走市能取岬の西方に所在する遺跡です。1982年の発見以来、北方民族博物館によって調査が継続されてきました。その結果、縄文時代、続縄文時代、オホーツク文化の時代、擦文文化の時代と、連綿と人びとが生活してきた場所であることがわかりました。

これまでに能取岬西岸遺跡から発見された最古の土器は、縄文時代早期、いまからおよそ10000～6000年前のものです。はるか昔から人びとがこの岬に暮らしつづけてた理由は一体何だったのでしょうか。発掘調査を行うことで、その理由の解明を目指しています。

もうひとつ発掘調査を行う理由に、遺跡の記録保存があります。遺跡は現在原野となっており、目の前はオホーツク海に臨む崖となっています。そのため、風による浸食を受け、遺跡の崩壊が徐々に進んでいます。岬に立地する重要な性格をもつ遺跡を、失われる前に記録し、出土遺物を保護する必要があります。

今回の調査は、崩落する可能性が高い箇所¹に4m×4mの調査区を設定し、発掘を進めました。これまでの調査では、出土土器のほとんどがオホーツク土器とされてきましたが、調査区から擦文土器がまとまって出土しました。また、遺物包含層が上下の2層に分かれることも新たにわかりました。

今後も遺跡の発掘調査を継続し、能取岬に暮らした人びとの歴史を明らかにしていきたいと思います。

(学芸グループ 種石 悠)



発掘調査の様子

講座

北方の機織り

2015. 7. 19

講師 佐々木 史郎氏（国立民族学博物館 教授）

特別展の関連事業の一つとして、国立民族学博物館教授の佐々木史郎氏を講師にお招きし、講座「北方の機織り」を開催しました。

佐々木氏が北方民族の文化について広く研究をされていることは近著『シベリアで生命の暖かさを感じる』（臨川書店）でも触れられていますが、最近特に関心をもっておられるのが「北方の機織り」ということです。



佐々木 史郎氏

織物・編み物では北方の厳しい寒さに耐えられないのではないかと、毛皮が手に入るのにあえて布を必要とするのか、さらに移動生活を送る民族では、時間のかかる織り仕事はしないのではないかという「常識」を疑うことが出発でした。

そうした視点から研究をはじめると、意外にも北方地域に機織り文化が広範に分布していることが明らかになってきたそうです。寒冷地でも、通気性や撥水性²といった実用性や、呪術的な意味合いから織られた布が一定の機能を期待されていることもわかってきました。

また、タタール、ブリヤート、ハンティ、マンシでは、100年以上前につくられた機織り製品が残っていても、機織り技術そのものは失われており、現地の博物館に収蔵されている織機の仕組みの違いなどから、機織り文化の伝播状況を探っています。

アムール地方では帯を織っても、北海道アイヌのように布を織ることはせず、これは布が容易に手に入る環境にあったからではないかと推測されています。

北方の機織りの研究の成果がまとめられたときには、また北方民族博物館でお話したいと思っています。

(学芸グループ 笹倉いる美)

講座

アイヌの人たちの歴史・文化に関する
学習授業の実践について

2015. 8. 5

北方民族博物館では、毎年夏休み期間中に、教員向けの研修会を開催してきました。今回は、はじめて網走地方教育研修センターとの共催で開催し、14名の先生に参加いただきました。

アイヌの人たちの歴史や文化について学校で教える機会は以前に比べると増えています。子どもの発達段階に即して、適切な指導を行うことが大切ですが、実際にはどうしてもよいのかわからないという先生が多くいらっしゃるということで、授業の参考になる内容の講座を計画しました。

当館を利用して総合学習等を行う際に、学校から事前に質問がよせられることがあります。そのなかからアイヌ文化に関する質問を約100問選び、先生に回答していただきながら、アイヌ文化についての知識の確認を行いました。

次に公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構のアドバイザー派遣制度の利用方法について紹介し、アドバイザーの磯部恵津子さんと時田幸恵さんの指導のもとアイヌ料理を作ったり、同機構からお借りしたこども用衣服に実際にふれたりもしました。このこども用衣服は3種類30着あり、同機構が送料のみで貸出を行っています。



アイヌ料理作りの様子

アイヌ文化や歴史の授業を行ううえで参考資料がないことや、先生自身の知識不足、差別をどう教えてよいのかや何をどこまで教えるのが適当なのかについて悩んでいることが、講座後のアンケートからわかりました。

今回は授業にこだわった内容にしましたが、より体験的なものを望む声も多くありましたので、次回開催時には反映させたいと考えています。

(学芸グループ 笹倉いる美)

映像上映会

北方民族博物館映像上映会

2015. 8. 29

今回の映像上映会は、下記の4作品を上映しました。

午前の部（子供向け）

- ①「アイヌのお話アニメ オルシベ スウォップ」2013年
 - ②「アイヌのお話アニメ オルシベ スウォップ2」2014年
 - ③「アイヌのお話アニメ オルシベ スウォップ3」2015年
- 企画・著作：公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

午後の部（大人向け）

- ④「四季・遊牧―ツェルゲルの人々― ダイジェスト版 前編」2006年

監督：小貫雅男 企画・制作：里山研究庵 Nomad

「オルシベ スウォップ」シリーズは、公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が2013年よりアイヌ文化振興事業の一つである「口承文芸視聴覚資料作成事業」として制作しているものです。アイヌ文化のオйна（神謡）やユカラ（叙事詩）などを、アニメーション映像を通じて分かりやすく紹介しています。

「四季・遊牧―ツェルゲルの人々―」はモンゴル研究者である小貫雅男が、1992年から1993年にかけて撮影した記録映像を元に制作した映画です。ダイジェスト版前編では、社会主義から資本主義へと移行する中で、時代に翻弄されながらも、自ら主体的な牧畜経営を目指して奮闘する、たくましい遊牧民の姿が日常風景を通じて描かれています。上映前に舞台となったモンゴル国バヤンホンゴル県の自然環境や映画撮影時の社会情勢、撮影後のモンゴル国における遊牧民の経済状況などについて解説を行いました。

次回の北方民族博物館映像上映会は2015年12月6日（日）に予定しており、「四季・遊牧―ツェルゲルの人々― ダイジェスト版」の後編を上映します。

(学芸グループ 野口泰弥)



会場の様子

第30回北方民族文化シンポジウム網走

北方民族研究30年

—成果・課題・博物館の役割—

今年で第30回を迎える本シンポジウムでは、北方民族研究の近年の成果と課題、博物館との連携等について検討します。

■日程：平成27年10月24日(土)・25日(日)、
各日9:00～16:00

■会場：オホーツク・文化交流センター
(エコーセンター2000)
[網走市北2条西3丁目/TEL.0152-43-3704]

■内容：国内外の専門家・研究者による研究発表
(日本語－英語の同時通訳付き)

関連事業：映画上映会「かもめ食堂」

■日程：平成27年9月25日(金)18:00開場、18:30開演

■会場：オホーツク・文化交流センター
(エコーセンター2000) エコーホール
※お申し込み・お問合せは、北海道立北方民族博物館内・北方民族文化シンポジウム事務局(担当 博物館課：下間、学芸グループ：中田)までご連絡ください。

ロビー展のおしらせ

① 北方民族博物館収蔵資料展 アイヌ文化の捧酒箸

北方民族博物館の収蔵資料のなかから、アイヌが儀礼の際に用いたイクバスイ(捧酒箸)を多数展示します。多様な彫刻と色彩をぜひご覧ください。

■会期：平成27年10月31日(土)～11月29日(日)

■会場：北方民族博物館ロビー(観覧無料)

② 北の人びとと動物たち

北方民族と北の動物たちのかかわりを、体験コーナーやクイズをまじえた展示で紹介します。

■会期：平成27年11月10日(火)～11月29日(日)

■会場：北方民族博物館ロビー(観覧無料)

■関連事業

○講座「寒いところにいるコウモリの世界」

11月21日(土)13:30～15:00 当館講堂(参加無料)

講師 近藤憲久氏(道東コウモリ研究所代表)

○講座「アザラシと人」

11月28日(土)13:30～15:00 当館講堂(参加無料)

講師 小林万里氏(東京農業大学教授)

INFORMATION

行事報告

◆6月6日(土)、講座「オホーツク文化の彫刻製品」(講師：種石悠学芸員)を開催しました。

◆6月13日(土)、はくぶつかんクラブ「革で作る編みかご風ペンスタンド」(講師：濱名亜璃紗解説員)を開催しました。



◆6月20日(日)、「ユハヌス～北方民族博物館の夏至まつり」を開催しました。

フィンランドのあそび「モルック」大会やコンサート、フラダンス披露などを行いました。

◆7月20日(月・祝)、海の日イベントとしてバイダルカ「アルガラッフ号」の試乗体験を開催しました。

◆7月25日(土)、はくぶつかんクラブ「夏休み・ミュージアムアルバムづくり」(講師：菅原章子解説員)を開催しました。



◆8月1日(土)、はくぶつかんクラブ「北の動物でつくるサンキャッチャー」(講師：石原生久代解説員)を開催しました。



◆8月6日(木)、平成27年度道立美術館等活用学習充実のための指導者研修を開催しました。

◆8月8日(土)、はくぶつかんクラブ「楽しい考古学入門 拓本づくりー土器のもんようをうつしとろう」(講師：種石悠学芸員)を開催しました。

寄贈資料

◆札幌市の弥永北海道博物館の閉館に伴い、同館がもつサミの資料17点が当館に寄贈されました。資料は、1980年代以降にフィンランドで入手されたものです。



サミの女性用帽子(寄贈資料から)

北方民族博物館だより No. 98

平成27(2015)年9月25日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
<http://hoppohm.org>
指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会